

# 随筆・評論

野村 宗一  
山口 育子  
山口 一選

特選

## 二人の幻の山

後三条町  
江畑 民子

以前から尾瀬に憧れていた。計画を練り、九月上旬に決行。夫は檜枝岐ひのえまたから三条の滝に向かう厳しいコースを選んだ。頭上にあるようなきつい傾斜の登山道だ。カエルが潰れたように岩にしがみつき、四つん這いになつて上がり下がりをした。目の前に木道が現れた。憧れの尾瀬ヶ原はすっかり秋の気配、一面が黄金色だった。ピカツと光った草原は、風に任せ波のように睡っていた。宿の小屋は薪ストーブが入り、すでに冬支度が整っていた。子ども達も成長し二人の時間も増してきた。

「山に登ろう。北アルプスに挑戦しよう」

夫が提案した。尾瀬が登山の自信に繋がっていた。老後への楽しみを見つけたのである。北アルプス最初の山は白馬岳だった。柵池つがいけから入る初心者向けのコース、足取り軽く出発した。山の天気は変わり易い。灰色の雲がドーンと重みを増し雨になった。手はかじかみ、足も冷たく固くなつていった。

初めて見る高山植物の女王「コマクサ」が、容赦なく打ちつける雨に必死に耐えている姿に釘付けになった。寒さと疲れで歩けない私は座り込んで眺めていた。

コマクサに元気を貰い、夫に助けられ、二九三二Mの頂上に到達。日も暮れてどしゃぶりの雨、出発から八時間経っていた。山小屋に入り夫が秘かに持ってきた梅酒で乾杯。甘い口当りに冷え切った身体がふあーと温かくなり、かじかんだ手足も緩んでいった。

北アルプスの山々の踏破は続いた。どの山にも鎖場があり、恐怖心は半端ではない。山小屋の主人が、山での予期せぬ事故を話した。

「がら注意を呼びかけた。」

「大丈夫だ。その窪みに手をかけろ」

前を進む夫の声を聞きながら、疎んだ足に気合を入れる。全神経を集中して一步一步踏み出す。下は深い谷底、落ちたら生命は無い。鎖場に直面すると、リュックがより重く感じられ、バランスを保つのが難しい。恐い。

危険を克復し頂上に到達、眼下のパノラマが恐さを忘れさせ、次の山へと駆り立てた。突然の雷鳥のお出ましも楽しみだった。

夫が退職した。記念になる山の相談は一段と盛り上がり、小躍りしながら地図とらめっこ、鹿島槍ヶ岳と決まった。時間はたっぷりとある。景色、高山植物たちをゆっくり、じっくりと味わうことが出来るのである。

準備万端、早朝に出発した。登山道の両側には、トリカブトの花が列をなし咲いていた。深みのある美しい青色は、暑さを忘れるほど涼しさを感じた。根っこに毒がある。花姿は上品で魅力的だが、悪用されたこともあり、可愛想な花なのである。

山の中腹に赤い屋根の山小屋が見えてきた。足が急に軽くなった。そんな時、突然夫が立ち止まり座り込んだ。足にケイレンが起きて、太股の筋肉が震えていた。初めての出来ごとに二人は面食らい、大きな不安が襲ってきた。

「少し休めば大丈夫だ。」

「山小屋まで行くぞ」

夫は力強く言った。私は足を摩りながら、どうしたものかと思案していた。

「私たちには時間はたつぷりあるから、今回は此処までしようよ」

夫が言うように、山小屋まで時間を掛けて行けば良かったかも知れない。しかしケイレンのある足では、おそらく辿り着けないと判断した。下に降りて温泉に浸かり、ゆつくり回復を待つのが最善だと私は考えたのである。

何時間掛かっただろう。あの長い登山道を足を抱えて、やっと登山口に辿り着いた。辺りは薄暗くなっていた。麓の温泉でゆつくりと身体を温めた。温泉は、心も温めてくれた。

再び挑戦するため、翌春から二人で芹川の土手を軽やかに足並み揃えて歩いた。赤い屋根の山小屋を思い浮かべながら、二人の気持は鹿島槍ヶ岳の頂上を目指し、一步一步踏みしめていた。五十代半ばから続いている北アルプス登山は、健康の証でもあった。

夫に突然の異変が起きていた。体調が悪くなり病院に行くと「ガン」と宣告されたのだ。まさか、嘘だ。すぐには信じられなかった。入院治療中も二人は、踏破した山や今から登る鹿島槍ヶ岳の話でもちきりだった。

「今年も山に行くぞー。一杯楽しもう」

夫と練り上げた山の計画は果されなかった。夫は逝ってしまったのだ。

父親似で山好きな二男は、体力がある。

「鹿島槍ヶ岳に登りたい。お父さんと約束した山、一緒に登ってくれないかな」

「良いよ。夏に行こう。体力つけておけよ」

夫と引き返した場所を、平静な気持ちで通過出来るだろうか。幻の夫に会えるだろうか。迷って、迷って、そして決心した。

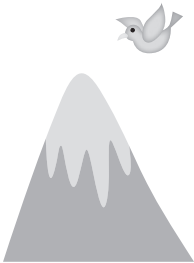
「この山は、お父さんと最後に目指した山だから、幻の山として大切にすね」

「そうか。そうやね。大切な山だね」

二男は深く頷いてくれた。

（評）

高齢になってから、日本アルプスへの本格的な登山を始めた夫妻の話であるが、前半の、主人公との登山の場面では、山の天候や高山植物のこと、危険な場所でのことなどが、臨場感あふれる巧みな文章で書かれている。後半は、主人公のアクシデントで引き返し、再度の登山を計画している内に癌で亡くなるが、二男の人の同行によって再挑戦を試みるという感動的な話を見事な起承転結の構成によって書かれていて読み応えがある。



入選

## 小池と鉢植えの稲子たち

野瀬町

水沢 郁

私の住んでいる辺りは、おそらくずっと以前は大きな河川とその支流の氾濫原だったにちがいない。そこが村人の共同の耕作地として開かれ、いずれ慣習によって区画整理がなされ、持ち主が定まり、代々受け継がれ、ヒヨドリやキジ、野ウサギやキツネなどが何恐れることなく、農夫の鋤の輝きをほかんと眺めているようなところになったのだろう。

そういう来歴の、田畑であったところが、地主たちが示し合わせていつせいに蜂起したかのように宅地になった。もと農民が大半を占めていた周囲から、稲の姿はもとより、畑というものをほとんど言っていないくらい見かけなくなっただ。半農であった私の家が米作りを放棄してもなお、周囲は稲穂で揺れていたところであったというのに。

晩秋のある日、地ならしのブルドーザーを載せた大型トラックが狭い市道を押しのけて

行き来するようになった。

家の屋敷畑に隣接していた田んぼに広い道路が取り付けられ、重機を積んだトラックが往来し、不動産屋と建設業者が堂々と跋扈し、またたく間に周囲から畑が消え田んぼも消えた。昼間は人も車も通らないような道にガードマンが持ちこたに立ちつくし、工事人が道を掘り返し水道管を埋設し、電柱が生えた。重機は農小屋を壊し瓦礫をトラックに運び、代わりに地上げ用の土を運び込んだ。新しい宅地内に幅広の道も作られ、まずゴミステーションが設置された。次にブランコ、滑り台、砂場ひとつずつの小公園が整備され、運動会の応援旗みたいな建売住宅業者の幟がはためき、関係者が続々と出入りし、あつという間に洒落た注文住宅や建売住宅が立ち並び、私より二世代近く下のヤングタウンができてしまった。

瞬時に過ぎた二年近くであった。

これはうかうかしていられない。村も私もおそろしいくらい年を取ってしまったことが浮き彫りにされたようなものだ。半世紀前、村はずれにできた瓦葺一軒家は、その築年数ゆえ、今やこの新興団地の入口の目印になってしまったのだ。

そんな感慨に襲われたとき、ふと稲を栽培してみようという気分になった。何かにヒン

トを得たのでもない。誇りたいのでも奇をてらいたいのでもない。ただこの村の由緒を示したかったと言えはいいのだろうか。先祖をたどれば、父方母方どちらも小作農の私の血が少し騒いだということか。

しかし、だからといって農地も体力もないのにいまさら田作りは無理な話である。小学校の校庭にあるような観察用の田んぼみたいな広さでよい。私はそう思った。

屋敷畑に向かうところに畳一畳ほどの小判型の池がある。水は三十年來張ったことがない。ブロックで囲っただけのものだ。そこに超ミニの田んぼを作ることを決めた。畑の土を何度も運んで埋めた。水を張ったが、いやに早く抜けていくようだが仕方がない。

この池のものと住人は、盆休みのときに川遊びに行った際、当時小学生だった息子が偶然捕まえたイシガメだった。ハンバーグくらいの大きさだった。

時がたつて子どもたちは家を出る年齢になり、ついでに妻も親の世話もあつて都会に出てしまい、妻の後を追って家を出た私が、父が亡くなってから週に一度は母の様子を見に来るようになり、母の加齢と私の退職とともに、この実家で過ごす日々も増していくということになった。

さて、すでに五月の連休を迎えていた。

私はこれも思い立ったが吉日と、JAの営農センターに電話で苗について問い合わせ、早い返事を得た。

孫たちが帰省したときに見せてやろうと思うのでほんの少しでよいのだと言うと担当者も喜び、残っていた苗の中から幾株かもらい受けた。

すぐに家に帰って、昔の記憶をたどって苗を少しずつばらし、小池に植えた。

苗はまだ十二分にあつたので、これがだめになつた場合を考えて、今はもう使っていない植木鉢を縁の下から引っ張り出してきて、適度に排水できるような小さな穴を微妙に調節し、スパー用苗鉢を作つて家畑に埋め込んだ。そうして池に十二把、植木鉢が六鉢、私の田んぼは整つた。私は苗を「稲子」と名付けてかわいがつた。

もうあれから一年半がたつ。安直な思いつきとぐうたらな稲作にもめげず、いや、そのせいで稲子たちは痩せ気味であつたが、思いのほかひと通りの粃を実らせ、かぐわしい稲藁を提供してくれた。

しかし、餅は餅屋である。田作りの、畑作りのプロにはかなわない。私は先人の、農人の、百姓の知恵とこだわりと職人技に深く恥じ入っていたことは言うまでもない。

## 入選

# 蘭

中央町  
近藤 正彦

(評) 先人が苦勞して開いた田畑が、近年住宅地に変貌していく様子が、両親とのつながりなどからめて巧みに綴られており、その土地の背景が伝わってくる。孫に見せたい思いから、小さな池で稲作に取り組んでみて、あらためて先人の技と知恵に思いをいたすという筆者の述懐が、さわやかな読後感を与えている。

あの日 私が醒井の梅花藻を見に行かなかつたら恐らく 詩人 星野富弘を知る事はなかつた。

朝の六時半、いつもより大きいラジオ体操のポリリズムに夢をやぶられ、眠気まなこをこすり乍ら起きて来ると、家内の何か魂胆のある時にする愛想笑いを見て、こら何か有るぞ、ぐっと身がまえた。

「あんた、今日は天気もよいし醒井の梅花藻でも見に行こか」そら来た。「ほやなあ天気も良いし行くか」有無を言うゆとりは私にはなかつた。

早や昼を食べたあと醒井に向かった。駅の駐車場には駐車禁止の立て札が置いて

ある「こら弱つたなあ・・・」と思つていると車が一台入つて行く。今だ、私も後に続いた。

駅前通りを歩いて行くと、向こうからどこかで見た顔がやつてくる。近づくにしたががつて目をこらすと何と、おしどり夫婦のHさんだ。私は右手を上げ、一寸ひにくまじりに言つた「やあ、えらい所でおあいしたね、今日もおそろいで」と言つて別れた。

程なくしてT字路に出る。

曲がり角には、こじんまりとした八百屋がある。そう言えば、スイカには目のない家内のこと。帰りには又持たされるのかなと思いつら道路を横切つた。

やがて私は川の縁に佇んだ。「水に入るか」水の流れに身をまかせひざまでつかつた。そよそよとなびく梅花藻を見たあとふと見ると、今日は醒井の廃品回収の日と見えて新聞や雑誌が山と置かれている。処がよく見ると本の束には「本日は回収しかねます」と書いたシールが貼つてある。

その雑誌は、ガムテープと紐でしつかりと荷造りされているが私は、わざわざほどこいて本を見ていた。

梅花藻を見に来た人達は、変な人やなあと言つて目つきで通りすぎて行く。私はどう思われ様と意に介さないが、家内は、そんな私の

横に立っているのが恥ずかしいのか、すたこらさつさと向こうに行つてしまった。

やがて多くの雑誌より一冊の本を見つけた。

ペラペラとページをくると、花がいくつも描いてあり絵手紙の様だ。

私は家に帰ってからゆっくり見ようと車にもどり座席の横に置いた。

帰つてつめたーいむぎ茶を呑み乍ら、本を見て、あつと驚いた。

筆者は星野富弘

昭和二十一年 群馬県のさる農家のせがれとして生を受け、大学卒業後は中学校の体育教師として赴任、処が悪夢は突如としてやつてきた。

赴任してわずか二ヶ月後に、クラブ活動の指導中、誤つて背中から落ちて、以降、手足の自由を失つてしまった。

治療すること実に九年あまり、そのかいてもなく退院し、失意のどん底にあえぎ乍らいたずらに年月は過ぎて行つた。

痒い所に手が届くと言つ言葉がある。

私は今日まで無意識の内に手足を動かして来た、それが当然の様に。

富弘は手足の自由がまったたくきかず、そのつど母の手を煩わさなければならぬ。

息子が、母親の世話をするのは世の常かも

分らないが、母にすべてをゆだねなければならぬと言ふがいなさは富弘にとっては悔しくも、はがゆい。

富弘の心のかつとうを思う時、運命とは言えその心中を察するに余りある。

富弘は今朝もベッドで身体を横たえ乍ら、部屋に飾られてある蘭の花をぼんやりと眺めていた。とその時何を思ったのか急に花が描きたくなり「母ちゃん、蘭をスケッチしたいので紙と筆を持ってきて」と叫んだ。

母は驚きをかくし得なかつたが、吾が息子のたつての願い、紙と筆を持って来た。

そして富弘は口に筆をくわえさせてもらい蘭を描き出す、だらだらとよだれをたらし乍ら。しかし手で描くのと違い、思う様には描けない。

長いながい時間がかかり、やがて絵と言えるしろものではないが、やっと仕上げた。

それからと言うものは、何かにとりつかれた様に、ふきのとう さくら たんぽぽ しょうぶ なの花 さつき くちなし・・・

気がつくくと、その数は数十枚になっていった。描かれた絵には簡単な詩が書き添えられたが、次の詩を読んだ時私は、ハンマーでガーンと頭を叩かれた様な衝撃を覚えた。

神様が、たった一度だけこの腕を動かして下さるとしたら、母の肩をたたかせてもらおう・・・。

曲がりなりにも五体満足な私は恥ずかしさを覚えつつ、そつと本を閉じた。

(評)

醒井で廃品回収に置かれていた本によって、筆者は星野富弘という人を知る。青年になってからの事故によって手足の自由を失った星野は、蘭の花を見て、口で絵を描くことを始める。そうして描かれた数十枚の絵に添えられた詩に、神様が一度だけ腕を動かして下さったら母の肩をたたきたい、と書かれていることに筆者は衝撃を受けるが、その感動に共感を覚える。



佳作

## 置かれた場所で生きる

犬上郡甲良町  
上野 初子

佳作

## 目が覚めてみれば

大藪町  
脇坂 修身

佳作

## 旅は道連れ

大藪町  
吉田 和治

佳作

## 横井庄一と日本人

平田町  
伊藤 眞雄

## 《総評》

今年度の応募作品数は、例年より数点少なく残念であったが、応募された作品のレベルはかなり高く、それぞれ読み応えがあった。

随筆や評論では、読む人に感動を与えたり、共感を覚えさせる作品が上位に入ることになる。それには、自分の目で見た具体的な情景描写や、自分自身としての思いを的確に表現することが重要である。

また、書きたいことが多くあるとどうしても散漫になる場合が多いので、テーマにそって絞り込む必要がある。

さらに、人に読ませようとする場合には、タイトルをみただけで、読んでみようかと思わせる題名の付け方についての工夫が大切である。

以上のような観点から、今年度の特選作品は一步抜きん出ていたと思う。

高齢者からの応募が多いのは喜ばしいことではあるが、今後はより幅広い年代層からの応募も期待したい。

野村 宗一

